

その結末は応報せしもの

日伐ともこ

聖騎士は等身大の血袋と化した。

ガンナーの銃撃で、エトリア執政院の床に真朱の紋章を記すこととなったのだ。達成感はなかった。国に帰還して自宅に落ち着けば、その時にはいろいろなものが心に去来するかもしれない。けど今は、現場を脱出するのが先だ。生きてる者は逃げ延びなくては。捕らわれた挙げ句、自白剤でも飲まされたら、すべてが水の泡になる。

だけど……あれはなんだ!?

聖騎士が倒れたあたりから、吹き出す勢いで現れたのは、無数の蔓の群体だった。

うろたえている間にも、蔓は、鞭がしなるような音を立てて伸びてきた。

考えるまでもなく逃走を選ぶ。すでに任務を果たしたからだけど、頭の中を一番強く支配していたのは、恐怖だった。しかし、足はうまく動かず、もつれ、私は転倒した。

荒い息と共に身体を起こし、壁にもたれかかった、それだけの短い間に、執政

院の床は、さらなる流血で染められることとなったのだった。

戸惑いの声と怒号は、間髪を置かず、悲鳴と断末魔に置き換わった。

私の仲間達は、皆が蔓に捕らわれていた。ぎちぎちと肉が千切れる音と共に、四肢をすべて別々の方向に引っばられていく者がいた。首を絞られた者は、悲鳴を上げることすらできず、鬱血した顔から目玉と血泡と腫れた舌を飛び出させていた。太い棘を無数に備えた蔓に捕らわれた者は、全身に棘をめり込ませられながら、その足元に血溜まりを作り、自身の顔を羊皮紙のように漂白していった。

ごき、と鈍い音がして、一人が、がっくりと頭を垂れた。奴を捕らえていた蔓は、まだ足りない、と言いたげに、生命をなくした身体を弄んでいた。

私に助けを求め、甲高い悲鳴を上げた一人の声は、恐怖を孕んでいたはずが、いつの間にか嬌声に変わっていた。服の下を這い回る何本もの蔓が、性感帯を刺激したらしい。蔓の動きに耐えかねて破れ始めた頭巾や装束は、暴力同然に叩き付けられる快楽に耐えられずに意識を飛ばした女の顔と、穴という穴に進入した

蔓の動作に合わせてひくつく肉体を、隠し通せなくなっていた。

私が仲間達と同じ末路を辿らずに済んだのは、ただ蔓が足りなかった幸運のおかげに過ぎない。這ってでも逃げなくては——そう思っても、目の前の、地獄の樹を召喚したような凄惨な光景から、目が離れてくれないのだ。

動け、動いてくれ、私の身体！ あの蔓が私の方に向かってこないうちに、犠牲者を弄ぶのに夢中になっているうちに！

だが、私の願いは叶わないようだった。すでに死んだ仲間を弄んでいた蔓が、屍を放り出し、私の方にその先端を向けたのだ。

喉が変な音を立てた。様々な謀略を実行するべく激烈な訓練を積み重ねてきた私達が、何もできずに倒れていく。逃げられないのなら、舌を噛むなりして、雇い主に累が及ばないようにするべきなのに、口は荒い息を吐き出すだけで、身体同様、思うように動いてくれなかった。足首に、手首に、胴体に、蔓が巻き付くのを、私は、戦おのきながらも、どこか他人事のように見つめていた。

次の瞬間に何が起きたのか、理由はわからない。

何かから急に後ろに引かれたかのように、なめらかに這い寄る緑の蛇の群れが硬直した。

その刹那、私は、というより、私の肉体は、即座に行動を再開した。ただ、あのバケモノから逃げるために。一刻も早く執政院から離れたい、という思いだけが、私の身体を動かしていた。走って走って走って走って、足裏に伝わる感覚が石畳から土に変わったところで、ようやく止まった。

仲間達をあの地獄に置き去りにしてしまったことに気付いたが、助けに行こうとも、戻ってとどめを刺さないとも、考えられなかった。あの蔓の充満した場所に戻るのには、肉体そのものが全身全霊で拒否していた。ならば、とつと立ち去ればいいものを、私の頭は意味不明の思考をぐるぐると繰り返すだけだった。

後に聞いた話によると、私はエトリアにほど近い森の中で、正気を失って震えていたそうだ。念のためにと特務の長が差し向けた後続班が、私を見つけたらしい。私以外の仲間はずべて落命し、エト

リアによって身元不明者として埋葬されたという。外部から雇ったガンナーのことは知らない。とつと逃げたのだろう。

ともかく私達の任務は完了したのだ。標的の抹殺は成功、生き残りから真相を聞き出されることもなかった。

けれど、正気を取り戻した後、そう聞かされた私には、任務をやり遂げたという安堵はなかった。

脳内には、あの時の、執政院での恐怖が、刻印されてしまったのだ。

失ったものは、特務機関の一員としての矜持。

そして、幼い頃から磨いてきた鞭の腕。愛用し、手に馴染み、自らの一部とも誇っていた鞭、それを手にすると、執政院で私達に襲いかかってきたあの蔓のバケモノを思い起こし、身体が硬直するようになってしまった。

再び鞭を手にすることができるようになるまで、実に五年。

表の立場の友人達に励まされ、時には叱咤されながらも、ようやく再出発地点に戻ってこられた私は、表の立場である一般兵士として、フォレストジェイルと呼ばれる地にある世界樹の迷宮の探索に

関わることを決めた。国王陛下より直々に世界樹探索を命ぜられた友人、表の顔の同僚である、五年間ずっと傍にいて励ましてくれた彼女に、私は報いたかったのだ。

この時の私は知らなかった。約一年間の迷宮探索に加わったことで、自分の寿命を縮めてしまったことに。

いや、探索に加わらなくても、私の運命は、残り数年となかったのかもしれない。



エトリアなどに足を向ける気はなかったけれど、命令なら仕方がない。

届けられた文には、樹フォレストジェイル海で得た情報を報告しろと記されていた。

かの樹海の探索では、恐ろしい事実が明らかになった。そもそも探索は、軍部の一部の企図した、樹海に秘められた力を利用して、再び戦争を引き起こそうとする計画によるものだったのだ。一般の調査隊や、公募に応じた冒険者達は、ただの露払い、捨て駒だったというわけだ。

樹海調査団は、非常事態として本国の

命令系統を一時離脱。調査団最強のギルドが、樹海の核を占拠しようとした、軍部過激派から差し向けられた調査官を撃退した——この世から叩き出すしかなかった。調査官はすでに樹海の力を得ていたのか、捕縛という甘い考えが通じる状況ではなかった。

一部始終はすでに国王に届いている。なのに、特務は、まだ隠された事実があると思っっているのだろう。だから、もっとも樹海の真実を深く知ることになった最強ギルドに偶然所属していた、私を呼び出したのだ。

私が知り得た情報で、国に報告していないことなど、ありはしないのに。それにしても、特務の長は何をしているんだ。もともと、国王にすら極秘で、かつて国が世界をほしいままにする力を持つていた時代を取り戻そうとしてた。六年前のエトリア襲撃も、そのために行ったもの。今回の件にも、間違いなく噛んでいる。国王から追及を受けていてもおかしくない。私から情報を得る余裕があるのだろうか。

指定場所は、エトリア郊外の屋敷。
エトリアにいた富豪の一人の持ち物だ

ったのが、売りに出され、私の国の商人が目をつけ、その仲介で貴族が購入したという。エトリアにはたいそう警戒されたいが、買い手は、ただの善良な個人。何かを企んでいたのは、仲介者——私の属する特務の一員、表の顔として商人の立場を持つ者だったのだ。元の持ち主が緊急脱出路として設えていた『秘密の地下階』を隠匿し、エトリアも新たな持ち主も知らないうちに、秘密の拠点としたのである。

エトリアの裏町に紛れた私は、とある路地裏にひっそりと設えられた扉から、中に入り込んだ。

内装はただの空き家だか、床収納を開け、二重になった底にある踏み込みのスイッチを作動させると、壁の一部が稼働するようになる。その奥が屋敷の地下階への入り口だ。隧道トンネルを木材で補強した道に、私は一步を踏み出した。

所々に明かりがあっても薄暗い道。しかし、樹海探索を成し遂げた私にとって、魔物が出るわけでもない一本道は、ただの通路だった。初めて来た時には、恐怖に震えが止まらなかったのにな、と苦笑いが浮かぶ。

鼻歌でも出そうな気分で、私は歩を進めた。呼び出された理由だって、ただの報告だ。本当に何もないのを納得させるのは大変かもしれないが、ある意味では気楽なものだ。

もつとも、報告後に、別の危険な任務を言い渡される、ということはあるかもしれない。でも、闇の仕事はもう疲れた。そろそろ足を洗おうかと思う。樹海の件がどうなっているか次第では、どさくさに紛れて逃げられるだろうし、探索で鍛えられた身、追っ手がかかったとしても負ける気はしない。

とすると、馬鹿正直にこの屋敷に来る必要もなかったんじゃないかな。

そんなことを考えた、その時だった。

「——こんにちは、はじめまして。ダークハンターのお姉ちゃん」

考え事をしながら歩いているうちに、屋敷の地下に到着したようだった。

重々しい鉄製の扉の前に立つ、人影がひとつ。長い黒髪をポニーテールにした、十代半ばの少女だった。扁平と聞いていい顔立ちは、東方民族の血筋を濃く受け

継いでいることを示している。私ほどじやないけど、黒い薄手の身軽そうな格好をしていて、しかしベルトには、これでもかというほど収納^{ポーチ}が装着されていた。

「……あんだ、誰？」

こんな奴特務にいなかった。私は一応、樹海探索直前までに特務に属していた人間の顔は全部覚えてる。

けれど少女は、私の思考を読んだかのように、につこり笑う。右手を突き出し、装着されていた手甲——これにも収納が付いていた——を取り外した。手首の裏側、曲げるとしわが寄るあたりに、小さな刺青が施してある。薄暗い中だけど、自分にも同じところに施されている紋章の形を間違はずもない。つまり彼女は間違はなく特務の一員で、たぶん新人なのだろう。

……やっぱり特務の本部は混乱しているのか。新人に情報伝達しないといけな

いとね。
私の内心など知るはずもない新人は、天真爛漫をそのまま形にした表情で、言葉

を続けたのだった。
「特務の偉い人はいろいろ忙しくて、私に用事が回ってきたの。ねえ、教えて。」

樹海では何があったの？」

「……何もないよ、調査団を通して国に正式に報告したこと以外はね」

「本当に？」

「拷問しても何もしゃべれないよ。だって本当にそれ以外知らないからさ」

少女は探るように私を見つめ、次から次に言葉を繰り返して行く。新人なりに、

任された役目は果たそうと必死なのだろう。だが、私から隠し事を聞き出せないと判断したらしく、ため息を吐いた。

「何もありませんって報告しなきゃいけないんだ。怒られそうだなあ」

「事実だからね。観念しな、新入り」

「仕方ないかあ。じゃあ、帰る前にお茶でも飲んでつてよ、お姉ちゃん」

そんなもんはいらない。私は早く帰って行方をくりますんだ。

私の心を読むはずもない新人は、私の手を引いて鉄扉の前に立たせると、いそいそと扉を開け、横にどいた。無機質さが先に立つ石組みの室内には、彼女が持ち込んだのか、丈の低い円卓と、東方伝来の茶器が揃えられている。場違いさに、ちよつと目眩がした。

私が入るのを待っていた新入りは、私

が踵を返したのに慌てたようだった。

「待つてよ、せっかく東方皇国から最高級のトガノオ茶を買ったのに」

「大方、自白剤仕込んであるんだろ？」

「そんなことない！ せっかく、初めて会う先輩について用意したのに……」

「可愛いこと言うのに免じて、ひとつ、教えてやるよ」

私は少女に向き直った。彼女の一举一動を注意深く観察しながら。

「自白剤を仕込んでるなら、それでこそ特務だって褒めてやるよ。でも、詰めが甘かったね。あからさま過ぎるんだ」

「違うよ！ そんなことないよっ！」

少女は泣きそうな表情で必死に訴えてくる。本当に馳走のつもりだったのか、自白剤を仕込んでたのを取り繕ってるのか、悔しいけど判断が付かない。樹海の情報を持つてないけど、本当に自白剤を飲まされたら、別件で隠していることを話しちやいそうだ。薬の効果に抵抗する自信は充分あるけど、それを試す義理もない。

「ま、有能そうな後輩ができたみたいで頼もしいよ。これからも、お国のために頑張るな」

——頑張る場はなくなっちゃうかもしれないけどね。

元来た道に戻る。念のため、意識は少女から離さない。だが、少女から遠く離れ、隠し通路の出入り口まで戻ってきて、特に何の変化もなかった。考え過ぎだったか。私は自嘲気味に肩をすくめると、空き家に出る扉に手を掛けた。

……開かない？

扉は、がちがちと虚しく音を立てただけだった。

けれど、私にはそれ以上扉に気を向けている間はなかった。唐突に、背後に禍々しい気配を感じたのだ。たらりと背を垂れる汗を拭く余裕もなく、私は、その気配の隙を必死で窺った。

それは先程の少女のものだった。

「逃げられないよ、お姉ちゃん。その扉は、私の仲間が締めちゃったの」

「あなたの仲間？ ……あなた、特務じゃないの!？」

「特務のパトロンに雇われてるのは確かだよ」

パトロンというのは、特務では長しかその正体を知らない。現在の日和っている国を昔のような強大な国家に立ち戻ら

せるために、特務に資金を提供していると聞く。それがどうして……。

はた、と思い立った。先日、樹海探索の結果、露わになった、軍部過激派の企み。たぶんそれに噛んでいるはずの、特務の長、そして、特務を己が手足のように使うパトロン……。

「……そうか、あたいた達を消すつもりなのか。そのパトロンに、国王の追及の手が届かないように」

「お姉ちゃん以外は、もう、私の仲間が消しちゃった」

そんな、馬鹿な……特務の実行部隊は、それなり以上には腕が立つ者ばかりなのだ。つい最近雇われたばかりの奴らなんか、そう簡単に消されるなんて……だが、驚いてばかりでいるほど、私はうかつじゃない。

「今回が私の初陣なの。一人でお姉ちゃんを倒して、爺ちゃんに褒めてもらうんだ！」

「……そうかい、残念だね！」

少女の言葉に隙を見た。私は、愛用の鞭を腰から引き抜いた。六年前のあの時、恐怖の対象となってしまうた、そして今は、あの時以前よりはるかに頼れるよう

になった——その相棒を、振り向くなり私は振りかざした。狙うのは相手の頭！

少女は予想外の攻撃にうろたえたみたいだった。初陣とかいって行くに、目の前の敵以外に意識を向けるから、そんなことになるんだ。それでも、避けようとしたその動きは、やっと初陣の半人前とは思えないものだった。甘くは見れないってことか。

ただ、一軍じゃなかったとはいえ、樹海探索で鍛えられてきた私の力も、まだまだ衰えていない。私の鞭は、相手の逃げ場に先回って、その頭をしたたかに打ち付けたのである。

「きゃあつ！」

少女は悲鳴を上げて膝をつく。私が近づくと音を聞きつけたか、顔を上げたが、その目はどこか虚ろだった。

「ごめんね。手加減できなかったよ」

「あ……つあ……」

言葉も言葉にならない。私の鞭の一撃で、脳が揺さぶられ、視覚、聴覚、言語能力が、一時的に低下している。いわゆる『頭縛り』だ。ただ、反射神経がものをいう身体能力は、期待するほど低下していないはずだ。

油断はできない。でも、私には、さらなる対処手段がある。

「そおれっ！」

彼女が意外と素早いのなら、それを潰してしまえばいい。私の鞭は、六年前に私を襲ってきたあの忌まわしい蔓のような素早さで、少女に襲いかかった。今度狙うのは足だ。

飛びずさろうとした彼女の動きは、私ですら瞠目するほどに鮮やかだったけれど、所詮は実戦経験に欠ける者の動きだ。今度の攻撃も過たずに彼女の足を捉え、したたかに打ち据えた。地に引き据えられた少女が、怨み深げに、虚ろな視線を私の方に向けた。

それにしても惜しい。いくら愛用とはいえ、何の変哲もない今の鞭じゃなくて、樹海探索で手にした鞭を持っていれば、こんなにもどろっこしいことをしなくても一撃で終わりだったんだろうけど。

「足、動く？……無理みたいね？」

今までとはうって変わって、地面を芋虫みたいに、腕の力だけで這いずる少女に、私は侮蔑の笑みを見せた。正直、他愛ない。ちよつとむかつ腹が立つ。この程度の奴で、私を消せると思ってたんだ、

パトロンをやつてた奴は。他の仲間達を殺したのがどれだけ強いのかは知らないけど、せめて、そいつらの中の一人でも、

この子の代わりに寄越せばよかったんだ。

ああでも、この子の初陣なんだっけ。

半人前の踏み台に使われてるってことか。

……やつぱりむかつく。

私は三度、鞭を振るう。

今までののは鞭で打ち据える攻撃だったけれど、今回は、彼女の片腕に鞭を巻き付け、思い切り引き寄せた。悲鳴を上げた少女は為す術なく私の方に引きずられてくる。足元にうつ伏せに倒れる少女を見下ろし、私は片足を彼女の縛っていない方の腕に乗せ、少しだけ力を加えた。

「はあい、これであんたは、手足は動かさず、目も耳もよく効かなくなっちゃった。そんな状態で傷つけられると、どうなると思う？」

取り出したのは予備の鞭だ。相手の腕を縛る鞭の柄を、それまでとは逆に持ち替え、予備の方を振り上げた。

ぴしり、と鞭が少女の背を打ち据え、黒い服を破る。

「はう……っ!？」

「ダメージを耐える体勢も取れないし、

攻撃がいつ来るかもよくわからない。ゾクゾクするでしょ？ イツチャウヤツもいるんだよ」

続いて、二度、三度。

「あんたもイツちゃつていいんだよ？

どうせ罫り殺されるなら痛いよりキモチいい方がいいでしょ？」

それを聞いたからか、少女は懸命に悲

鳴を堪えているようだった。でも無駄。悲鳴は苦痛を和らげる手段のひとつ。それを封じちゃったら、脳みそが堪えきれない痛みをせつせと快楽に変えちゃう分が増えるだけだから、余計に早くイツチャウだけなのね。

「うっ……ああっ、あん……」

案の定、私の鞭に打たれ続ける少女の様子は、次第に変わっていった。耐えていた悲鳴は漏れ出て、目からは涙を、口からは涎を垂らし、全身は熱を帯びて赤く染まっていく。鞭の一撃と共に身体を震わせ、呼吸は荒く、黒い衣装の秘部のあたりが、ますます黒く浸みってくる。心の裡はどんなものか。少女の痴態を見下ろして、私はにんまりと充足の笑みを浮かべた。半人前を差し向けられたという憤りが、なんとか晴らせた気がした。

……いけない。八つ当たりより、とつとと始末を付けて逃げなきゃ。

少女の腕に巻き付けていた鞭を解いて、一振り。彼女の首に巻き付かせ、柄を引く。小刻みに痙攣していた少女は、うつ伏せに眠っていた飼犬が鎖を引かれた時のように首を伸ばされ、かすかに苦悶の声を漏らした。

「首を絞められていく気分を教えてあげてもいいけど……時間もなさそうだからねえ」

この私を殺すなら、殺されるつもりで来い、と知らしめてやらなきゃ。

彼女の腕から足を離し、代わりに背に置いて体重を掛ける。そして、彼女の首に巻いた鞭を、思い切り引いた。

ごきり、と鈍い音。彼女の頸椎が脱臼骨折を起こした——気がした。

まさか、こんなことが起きるなんて。

手応えを失い、だらりと垂れ下がった鞭を見て、私は今までになくうろたえた。当然だろう。首を絞めたと思ったその瞬間、彼女の身体は、ぼんつ、と、煙になつて四散したのだ。

そんなのって、ありえない、人間なら。でも、私が昔学んだ知識の中に、そうい

う現象が起こる理由、起こせる人間についてのもので、ある。

けれど、その知識を完全に呼び起こせるまでの短い間に、ふっ、と何かが背後から飛んできて、私の足をかすめ、足元に刺さった。私の影を地面に縫い止めようとするかのように。

「あんたは……！」

後ろを向く。足は根が生えたみたいにな動かなくなつてたから、振り向くことしかできなかつた。

「あんたは、シノビだったのか……！」

天井に逆しまに立つ、今し方生命を奪つたつもりだった少女。

彼女は、東方の闇の技術を継ぐ者だったのだ。様々な道具を使いこなして目的を遂げる他、私達には理解できない技を使つて、人の影を地に縫い止めて足止めしたり——。

そして、自分と寸分と変わらない分身を作り出すことも、できる。

私が今まで相手していたのは、彼女の分身に過ぎなかつたのだ。

してやつたり、という感じではなく、曖むしろこちらを哀れんでいるような、曖昧な笑みを浮かべる少女は、その笑み同

様の静かな声を出した。

「ダークハンターの技つてすごいね。

勉強になつたわ、お姉ちゃん」

天井を苦もなくすたすたと歩き、私の正面に場所を移す様子は、純粹に驚嘆に値するものだった。

それに——分身とはいえ自分の痴態を一部始終見つけていたはずなのに、それを他人事と、否、ただの『状況』としてしか見ていない、冷やかな瞳。それは、第一印象とは全く違う彼女の本性を、明確に表していた。油断しているつもりじやなかつたけど、警戒が足りなかつたことを、私は悟つた。

現に私の足は彼女の技で縫い止められてしまっている。とはいっても、効果は永遠じゃないだろうし、それまでは鞭で凌ぐこともできるかもしれない。諦めの悪い私は、鞭を構え、相手のさらなる攻撃に備えた。

けれど、私の腕は中途半端なところで止まつた。

慣性で予定通りの軌道を描く鞭には、空を裂くほどの力は残つてなかつた。

何か策があつて止めたわけじゃない。止まつてしまつたんだ。私の腕は、突然

硬くなって、思い通りに動かなくなつたんだ。

樹海探索をしてた時に、『石化』という状態異常に苦しめられたことがある。その感覚に、よく似てる。

『石化』は、石になる、っていつでも、本当に鉱物に変わるわけじゃない、全身の表皮が硬くなって、五感が鈍って、ぴくりとも動けなくなるんだ。ドクトルマグスの『皮硬化』が効き過ぎちゃった感じだろうか。でも、この状態異常のエグいところは、絶対に自然治癒しないことと、そのくせ、意識と内部組織の働きは、きつちり残ってるってことだ。樹海で全員石化して、丸二日放っておかれた挙げ句、やっと救助してもらえた冒険者は、みんなイツちやつてたって話だ。

私の身体は、樹海での『石化』とは違って、あつという間に動かなくなるわけじゃなかった。でも、感覚の鈍りは、少しずつ、確実に私の身体を蝕んでいく。まさかこんなところで必要になるなんて思ってたなかったから、回復薬とかも持っていない。

「あんた……あたいに何をしたの……!？」
目の前の少女の仕業なのは間違いない。

だけど、さつき私の足を縫い止めた技には、そんな感覚はなかった。じゃあ、一体、いつ……？

逆しまに立つ少女は私を見下ろして——彼女からすれば見上げている感覚かもしれないけど——口を開いた。曖昧な笑みは、誇らしげにも、嘲りにも、変わることはなかった。

「やつと効いてきたのね、お姉ちゃん。『飯綱』って技を使う時に使う薬を煙にしたのを嗅がせてあげただけど、やつぱり、すぐには効かなくなつたね」

薬……？ シノビの技名にはあまり詳しくないけど、他人を石化させる技もあると耳にしたことがある。でも、いつだ？ ここに来てから、それらしいものを嗅がされた記憶はない。まさかこの隧道トンネル全体に撒いていたとか？ いや、閉鎖空間とはいつてもこれだけ広い場所に煙薬なんて、現実的じゃない。せめて一部屋くらいの場所じゃなきゃ——。

そこで私は気が付いた。自分が知らないうちに、この結末に招き入れられていたことに気が付いた。

少女がまだ猫をかぶっていた時、私に茶を馳走しようとして開けた扉。その奥

に準備されていた調度の場違いさに、目眩を感じたものだった。

あの時気にしていたのは、緑茶の中に自白剤が仕込んであるんじゃないか、ってことだった。だけど、違った。毒は自白剤じゃなくて石化薬、室内に充満していたのだ。開いた扉から流れ出て、私は無色無臭のそれをまともに吸ってしまった。目眩は、毒物が体内に入ったから起きたことだったのだ。少女はあらかじめ解毒剤を飲んでいたのである。

仕組まれた、と思った時には、私の身体は、ぴくりとも動かなくなっていた。五感も鈍くなっていて、少女が何か言ってるのも、ひらりと地面に降りて立ち去っていく姿も、よく聞こえず、よく見えない。まばたきを奪われた目が涙を流し、浅くなった呼吸が苦しみをもたらす。そして、私は立ちつくしたまま、ひとり、誰にも顧みられない地の底に置き去りにされた。



それからどれだけの時間が過ぎたのか、私にはわからない。少なくとも丸一日は

経つたんじゃないかと思う。

私を薙ぎ倒す風もなく、焼き焦がす日光もないこの場所だけれど、食料も水も採ることができない私の生命は、長らえてもせいぜい数日だろう。ぴくりとも動かず、表情を変えすることもできなくなつた皮膚の下で、私は、飢餓と渇水、まともな呼吸と排泄の欲求、そして、ずっと同じ体勢を取らされている苦痛に、喘いでいる。涙は枯れ、潤いをなくした目は、もう機能を果たしていない。完全に固まつた時に半開きだった口は、からからに渴いている。このまま気が狂うのが先か、生命が尽きるのが先だろうか。

苦痛の合間に、屈辱と後悔が押し寄せ

る。なんで私は彼女の攻撃を切り抜けられなかつたんだろう。私は樹海で強くなつた。二軍だったけど、生半可な相手には負けないほどの力を得た。樹海を離れて久しいけど、その力はまだ衰えていないはずだ。樹海の強力な魔物の特殊攻撃ならまだしも、樹海にも入っていないだろう相手が用意した薬に冒されるなんて。

——否、樹海で力を得たという慢心が、隙を作ってしまったのだ。

……思えば六年前。私はまだ樹海の中のことを知らない、ただの特務だった。私だけじゃない、みんなも、雇ったガンナーもそう。逆に、標的の聖騎士は、樹海に入り、探索に大いなる貢献をした、歴戦の猛者だった。

私達が束になってかかっても、暗殺が成功する可能性は低かった。私達は、彼の慢心を逆手に取ることにしたのだ。

彼自身は、慢心しているとは思っていなかっただろう。樹海で培った強さを自覚しつつも、過信しないように心していたに違いない。けれど、そんな人間でも、ほんの少しだけ、油断をすることがある。

執政院を襲撃した私達特務を無力化した、と思った彼は、事件はどうにか終わった、と、ふっと力を抜いたのだ。弱者だったら、まだ隠れている敵はいないかと、気が気でなかっただろうに。

特務が彼を倒せなかつたら、その隙を突いて、雇ったガンナーに撃ち抜かせる。それが、樹海帰りの猛者を葬ろうとした私達の策だった。樹海を知らない弱者の策だった。

……そして、現在。

樹海帰りの私は、油断は禁物、と思

つつも、どこかで慢心していた。樹海を知らないあのシノビの少女を侮つたのだ。彼女はそんな私の用心と慢心の隙間を突いた。愚か者が、本当に自分を冒す薬に気付かぬうちに蝕まれるように。

そもそも、律儀に報告など考えず、最初から姿をくらすべきだったのだ。

こうして、私は、六年前に私達が殺した聖騎士になつたのだ。

今ならば心底から言える。もしも樹海探索で得た力を誇る者がいたら、たとえ得た力がどれほど巨大でも、精神の隙間を縫って忍び寄る蛇に注意せよ、と。

真に恐るべきは人間。

その心の隙と、それにつけ込む狡猾さ。たとえ、敵がどれだけ力なく見えても、己の油断と、相手の知恵こそが、自らを滅ぼす炎の剣となるのだ、と。

おねがい たすけて ゆるして
たえられない もうげんかいなの
ゆるしい いたい

しにたえない

DEAD END